

第四十四回新田次郎文学賞決定発表

正賞及び副賞百万円

公益財団法人新田次郎記念会

受賞作

理事長 藤原正彦

『愚道一休』 (集英社)

木下昌輝

選考委員
熊谷達也 澤田瞳子 諸田玲子

第四十四回新田次郎文学賞は、四月右記のように決定致しました。この賞は、故新田次郎氏の遺志により設定されたもので、氏の印税を基金とし、左記の規定によって年一回授賞されます。

一、前年一年間（第四十四回は令和六年一月―令和六年十二月）に初めて刊行された作品。
一、小説、伝記、エッセイ、長短篇等の形式の如何を問わない。
一、歴史、現代にわたり、ノンフィクション文学、または自然界（山岳、海洋、動植物等）に材をとったもの。

一、以上の条件を満たしたその年の最もすぐれた作品を選定する。
(尚、本賞では、候補作の発表は致しません)

選評
澤田瞳子

空をつなぎ、描く

新田次郎文学賞の性質からして、特定の人物の生涯を通史的に描いた作品が候補に選ばれることがしばしばある。今回の受賞作『愚道一休』もその例にもれず、まず稚児・千菊丸として登場した主人公が、周建、宗純、そして一休となり、世の変化と愛別離苦のしがらみにもがきながら生きる様が描かれる。選考会では本書を労作として評価する一方、一休の生涯と歴史背景をあまりにも克明に物語に織り込み過ぎている点が指摘され

た。具体的には、南朝との関わり、立て

続けに登場する二人の女性、地獄大夫と森の存在などである。そのかたわら、一休をヒーローに祭り上げず、一貫して不完全な人物として描き続けた点は、克明過ぎる記述を物語として際立たせる結果をもたらしており、大きな瑕疵とは評されなかった。

本作において特徴的な事柄として、本来は記録されず、当事者以外が知る由もない公案（禪問答）のやりとりの数々が、筆者の想像によって描かれている点がある。この公案の回答が正しいのかどうかを判じる術は、読者はもちろん、作者本人ですら持ちえない。だがそもそも文学とは、そのままでは漠として形のないうこの世の多くの事柄を、文字という形によってつなぎとめる営為である。歴史小説とは時に史実という既存概念に振り回されるあまり、自身の内なる文学性を二の次とする愚を犯しかねぬ危険なジャンルであるが、筆者は完全なる空を空想で以てつなぎとめ、それを一休という男

の求道の芯として描いた。

分かりやすい物語、分かせようとする物語が世に横溢する一方で、社会は常に不透明さに満ちている。その不透明と人間の矛盾をむくつけに、空を空として捉える試みの果てに描き出された物語に心からの賛辞を送りたい。

「受賞、まことにありがとうございます。」

受賞の言葉
木下昌輝

人間の不思議さを
知りたかった

人の心は、どんな形をしているのだろう。大学生の時、そんな疑問が湧いて精神病や死刑囚、戦史物などのノンフィクションを読み漁りました。宇宙や深海の不思議に通じる謎が、人間の心の奥底にもあることに興奮しました。

当時の気持ちを『愚道一休』執筆時に思い出しました。人の心を測ることはとても恐ろしいことはないのに、一休ら禪僧は



1974年、奈良県奈良市出身。近畿大学卒業。2012年「宇喜多の捨て嫁」で第92回オール讀物新人賞受賞。2014年単行本「宇喜多の捨て嫁」を刊行。同作は第152回直木賞候補に。他に『天下一の軽口男』『宇喜多の楽土』『戀童夢幻』『秘色の契り』など。